

評価項目 1	(ア) 体系的な履修を促す科目編成となっているか (イ) 開講科目数は履修登録者数、専任教員の担当状況から見て適切か
参照資料	<ul style="list-style-type: none"> <li>・開講科目・講義数の状況（科目区分別・3カ年程度）</li> <li>・単位修得要領（カリキュラムマップ）</li> <li>・カリキュラムマップ集計データ（アセスメントブック）</li> <li>・卒業時アンケート（経年比較）</li> <li>・ALCS 学修行動比較調査（他大学比較・3カ年）</li> <li>・その他参照した資料（<span style="float: right;">）</span></li> </ul>

### 《各部局による点検・評価》

#### 【検証結果（全体概要）】

(ア) 英文学専攻では、教育課程編成・実施の方針のもと、学士課程での学修を基礎として、高度な専門性を身につけることのできる教育課程を体系的に編成している。特に、科目選択の柔軟性を確保するために、各専門分野において講義主体の特論科目とゼミ形式による演習科目を開講している。これにより、講義を中心としたコースワークと、院生が主体的に発表し議論を行う演習の組み合わせを基本にし、さらに修士・博士論文の指導を通したリサーチワークにより、高度な知識と研究手法を体得しうる教育課程を体系的に編成している。

(イ) 開講科目数は、2021 年度が前期課程で 24 科目、後期課程で 6 科目（研究指導は含まず）、2022 年度が前期課程で 22 科目、後期課程で 7 科目（研究指導は含まず）となっており、全てを専任教員が担当している。

#### 【成果が上がっている点】

(ア) 文学、言語学、異文化理解、英語教育など、多様な科目を用意しており、院生は自分の専門に偏らず、幅広い学修を行った上で、修士・博士論文に取り組んでいる。

(イ) 全ての科目を専任教員が担当しているので、指導のための研究室が確保されており、また、学生の希望に合わせて時間等を融通して指導を行うことができている。

#### 【課題となっている点】

(ア) 現在は所属する院生が少ないので現科目数で不足はないが、数多くの多様な院生を迎えるとなると、科目数と内容の充実が必要となるだろう。担当専任教員の数を考えると、非常勤講師の導入も検討していかなければならない。

(イ) 同上



(イ) 同上

【成果が上がっている点】

(ア) 特筆すべき事項なし

(イ) 特筆すべき事項なし

【課題となっている点】

(ア) 論文指導を継続して行う教員以外の授業において、次の学期に受講がない場合は、期末レポートへのフィードバックを行う機会を作りにくい。

(イ) 特筆すべき事項なし

評価項目 4	(ア) カリキュラム上主要な科目には専任教員を配置しているか。 (イ) 非常勤比率の高いカリキュラムとなっていないか。
参照資料	・授業担当一覧 ・科目群別非常勤比率（3カ年程度） ・その他参照した資料（ ）

《各部局による点検・評価》

【検証結果（全体概要）】

(ア) 現在提供している科目は全て専任教員が担当している。

(イ) 同上

【成果が上がっている点】

(ア) 前述のように、全ての科目を専任教員が担当することで、指導のための研究室が確保されており、また、学生の希望に合わせて時間等を融通し、授業時間外の個別指導も容易なので、きめ細やかな修論・博論指導を行うことができている。

(イ) 同上

【課題となっている点】

(ア) 特筆すべき事項なし

(イ) 非常勤率がゼロとなっているため、提供できる授業科目数に限りがあり、院生が増加した場合、多様な授業提供ができない状況にある。今後、新学部のカリキュラムを前提として、大学院科目の内容

や数を再検討し、それに合わせた人員配置について考えていく必要がある。

評価項目 5	学科・専攻等個別の FD 活動について、どのような内容・目的で実施しているか。
参照資料	・ FD の取り組み状況 ・ 前年度点検シート ・ その他参照した資料（ ）

《各部局による点検・評価》

【検証結果（全体概要）】

新年度のシラバスチェックの機会を利用して、全教員がシラバスの書き方や授業の進め方、評価方法について意見交換を行い、全体の統一を図っている。また、教員および院生・修了生の寄稿により紀要『英語英米文学論輯』を発行し、相互に論文査読を行うことによって、論文指導力の向上を図っている。

【成果が上がっている点】

2022 年度 5 月に実施された「大学院改革アンケート」において、入学者激減の実態把握と理由分析を専攻科全体で行い、その結果を全員で共有することができた。

【課題となっている点】

現在本専攻科が抱える最大の問題は、入学者数の激減である。上記の成果を受けて、入学者を増加させるための方法を探り、カリキュラムの見直しや今後の取組等について検討し、FD 活動につなげてゆく必要がある。

評価項目 6	(ア) 職位、年齢、性別のバランスに配慮した教員組織編成をおこなっているか。 (イ) カリキュラムに基づく教員組織となっているか
参照資料	・ 教員組織編制方針 ・ 専任教員の状況 ・ その他参照した資料（ ）

《各部局による点検・評価》

【検証結果（全体概要）】

(ア) 教員組織のバランスについて、2021 年度は、12 人中、職位に関しては教授が 7 人 (58%)、准教授が 5 人 (42%)、年齢に関しては 60 歳代が 1 人 (8.3%)、50 歳代が 7 人 (58.3%)、40 歳代が 4 人 (33.3%)、性別に関しては男性が 8 人 (66.7%)、女性が 4 人 (33.3%) であった。また、2022 年度は、11 人中、職位に関しては教授が 8 人 (72.7%)、准教授が 3 人 (27.3%)、年齢に関しては 60 歳代が 1 人 (9.1%)、50 歳代が 7 人 (63.6%)、40 歳代が 3 人 (27.3%)、性別に関しては男性が 7 人 (63.6%)、

女性が4人（36.4%）である。全体として教授率が高めとなっている。

（イ）カリキュラムとの関連については、カリキュラム・ポリシーを踏まえ、英語学英米文学および英米文化・英語教育で構成されるカリキュラムに対し、それぞれを研究分野とする教員を配置しており、カリキュラムと各研究分野が整合している。

#### 【成果が上がっている点】

（ア）これまで指導の経歴が長く、研究者としても成果を積み重ね、論文数も多い教員が数多く授業を担当することで、院生の指導に役立てることができている。

（イ）様々な研究分野をもつ教員が担当することで、幅広い学びを提供することができている。

#### 【課題となっている点】

（ア）教授の率が高く、また近い将来女性の比率が下がることが見込まれるので、今後の採用人事では、准教授か講師を採用することが必要になってくる。また、公募の際に、同等の業績や能力を有すると判断される場合は、女性を積極的に採用することも考慮に入れる必要があるだろう。

（イ）かつてと比べて、博士後期課程の担当教員、特に論文指導の資格を持つ教員が減少してきている。今後、院生が増える場合には、指導体制にも影響するので、対策を考える必要がある。

### 実施責任者からの具体的な向上・改善施策（案）

#### 具体的な向上・改善施策（案）について

大学院入学者を増加させるための方法として、カリキュラムの見直しも含めて、すでに専攻において多くの議論が進められていることと思われる。本質的な改善策とは言えないが、現行の漢語調授業科目名を改め、イギリス文学やアメリカ文化、英語コミュニケーション、Writing Skills といった表記に置き換えていくだけでも、何かが変わり始めているような印象を生むかもしれない。

また文学研究科の3専攻合同によるオンライン大学院入試説明会の開催も検討したいものである。